

巻頭言

専門家の役割

日本原子力研究開発機構 辻本 和文

2020 年 4 月から本部会会長を仰せつかったが、残念ながら部会員の方々と直接言葉を交わす機会が激減してしまいました。関係者の努力のおかげで、オンラインで学会年会や研究会が開催されて、職場に居ながらにして皆様の研究成果を知ることができるのは良い面もありますが、画面に映る自分の顔にいささか食傷気味です。ここ 1 年あまり、「不要不急」という言葉がよく聞かれましたが、この言葉を聞くたびに「不要の要」という言葉を思い出していました。直接会って雑談する中で、新しい気づきを得ることはよくあることですが、オンラインの会議では、そうした雑談をするのは難しく、やはり直接会って議論を交わすというのは、とても大切なことだと改めて考えています。

このような事態が起こっているのは、言うまでも無く新型コロナウイルス感染症の拡大が原因です。この 1 年を振り返ると、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、二度も緊急事態宣言が発出され、本稿執筆時点では、一部地域では二度目の宣言が発出されたままです。昨年の 3 月の最初の緊急事態宣言発出前に、数理疫学や感染症数理モデルというものがあることを初めて知り、実効再生産数という言葉も良く聞くようになりました。これは、我々が良く知っている実効増倍率とよく似た数値だと思っていましたが、原子炉理論のほうが生物学的概念を基にしているので当たり前の話ではあります。ところで、緊急事態宣言の発出や解除にあたっては、専門家の意見が非常に重要視されていますが、その専門家の発する言葉がとても気になりました。

数理モデルによるシミュレーション結果を基に、人との接触を可能な限り減らすことが必要であると訴えた専門家の方がいました。そのシミュレーション結果を見たときに、極めて単純化された簡易な式であることに衝撃を受けるとともに、そのような単純化された式で、大胆な警告を発する姿に強い違和感を持ちました。また、別の専門家は、エビデンスは無いと断言しながら、特定の政策を感染拡大の原因だと批判していました。単純化することで本質が見えてくることがあるのも事実ですし、専門家の勘も無視できないことは十分承知しているつもりです。しかし、炉物理分野では、実験結果等に基づくベンチマーク解析等で十分な検証もされていないシミュレーション結果は、ほとんど意味がありません。他の分野では、シミュレーションの意味が異なるのか、この疑問は未だに私の中で解決していません。

緊急事態宣言といえば、今年で東日本大震災から 10 年がたちますが、2011 年 3 月 11 日に、原子力災害対策特別措置法に規定する原子力緊急事態が宣言されましたが、いまだに解除されていないことを覚えているでしょうか？10 年も続く緊急事態という日常にすっかり慣れてしまっていますが、部会員の皆様には、解除の条件が整うように専門家としての貢献を考えるとともに、原子力の未来について、それぞれの専門家としての役割を果たされることを切望します。

(令和 3 年 3 月 18 日)